





# 隠木即

## 黄檗の三筆

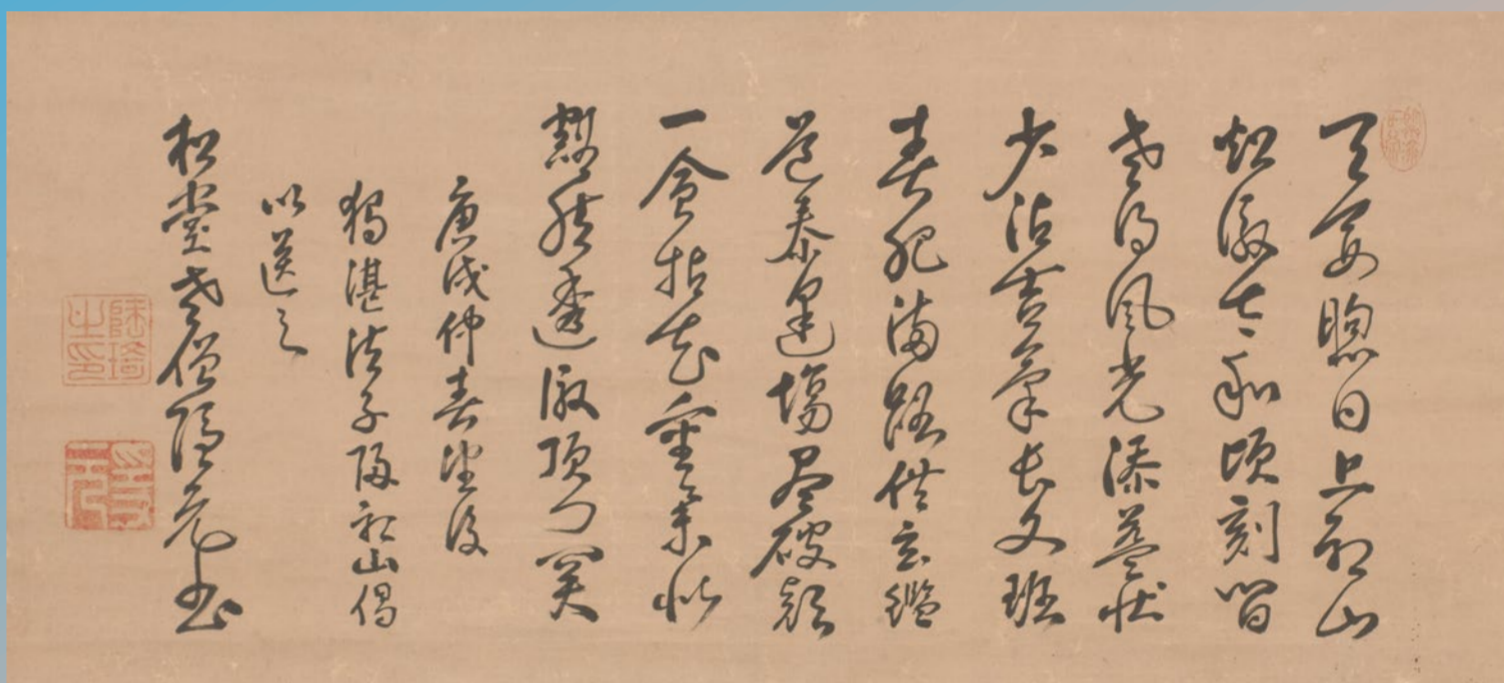
江戸時代、承応三年（一六五四）に明末の中国から長崎へ渡来した隠元隆琦（一五九二～一六七三）は、黄檗の禅の教えのほかにも多くの文化を日本へもたらしました。堂々とした書もそのひとつです。隠元と、その後について長崎へ渡った木庵性瑫（一六一一～一六八四）、即非如一（一六一六～一六七二）の三人は能書家としても名をはせ「黄檗の三筆」と称されます。三人の書は日本で珍重され、大変な人気を博しました。こうした黄檗僧たちの渡来により、中国の書風、いわゆる唐様の書が江戸時代に隆盛を誇るようになります。本展では、そんな「黄檗の三筆」がしたためた墨蹟をはじめ、中国から長崎へ渡来した黄檗僧の書を集めます。

「黄檗の書」や「唐様」と言うものの、その書体や書風は共通したものではなく、むしろ各人の個性がよく表れています。例えば、隠元が記した一行書「胸流太古春」は太く力強い筆でありつつも全体に丸みがあり、やわらかく均整のとれた書です。対して木庵の一行書「縦横不是塵」はスピード感が伝わってくる筆運びとなっています。即非は楷行草すべてに優れ、多くの墨蹟をのこしました。「醒語」は小品ながら、流麗な筆致が素晴らしい一作として知られており、最後に「臥遊居」と記されていることから、長崎の崇福寺の末庵で書かれたものであることが分かります。

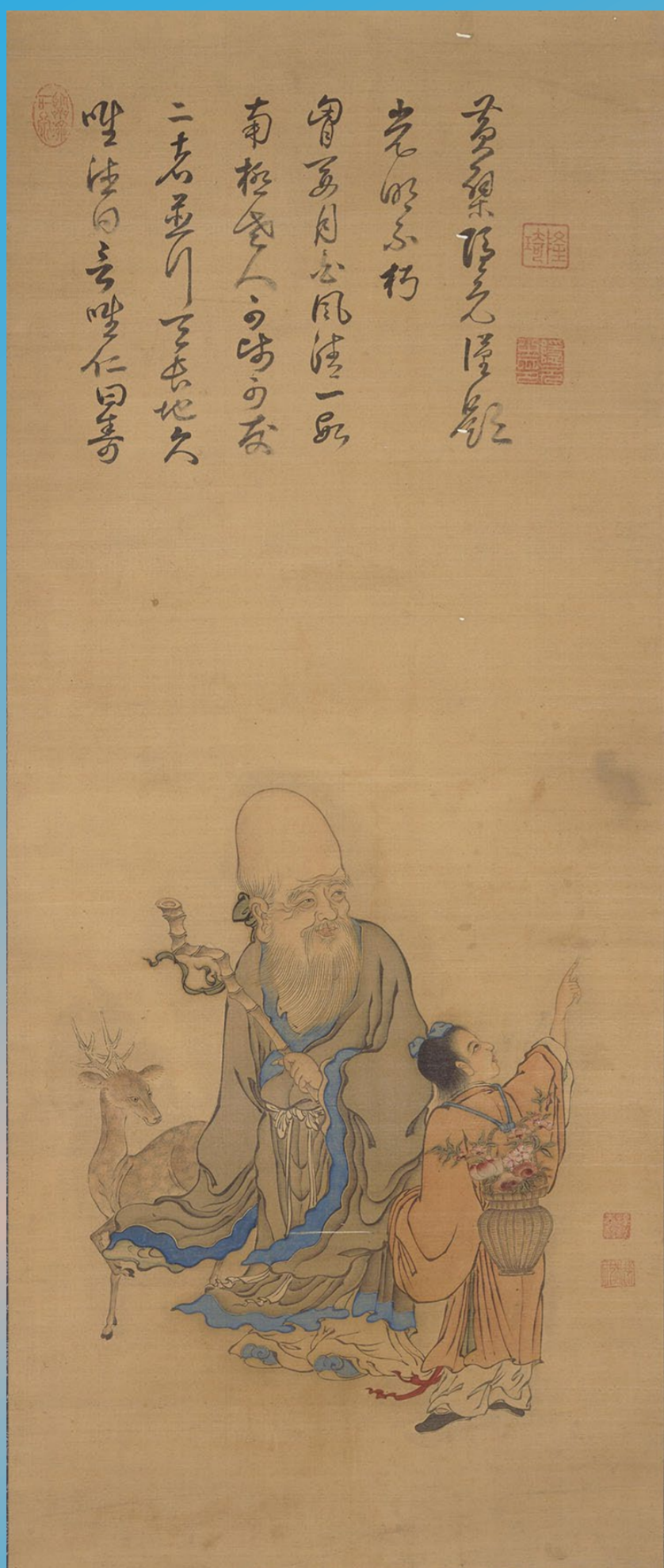
墨蹟をのこしたのは「黄檗の三筆」に限りません。本展では隠元より先駆けて来日し、日本の書と篆刻に多大な影響を与えた独立性易や、隠元渡来以降に日本へ渡った黄檗僧の書もあわせて紹介します。

また、渡来黄檗僧の中には書だけでなく、絵を得意とした人々もいました。隠元を長崎へ招請した来舶明人である逸然性融（一六〇一～一六六八）は晩年になって本格的に画を描きはじめ、唐絵の祖としてその後の日本の絵画に大きな影響を与えています。更に隠元に随って来日した獨湛性瑩（一六二八～一七〇六）は独特な筆で多くの絵を描いており、最近人気を得つつある、白隠や千厩といったユーモアあふれる禅画の先駆けとも言える存在です。

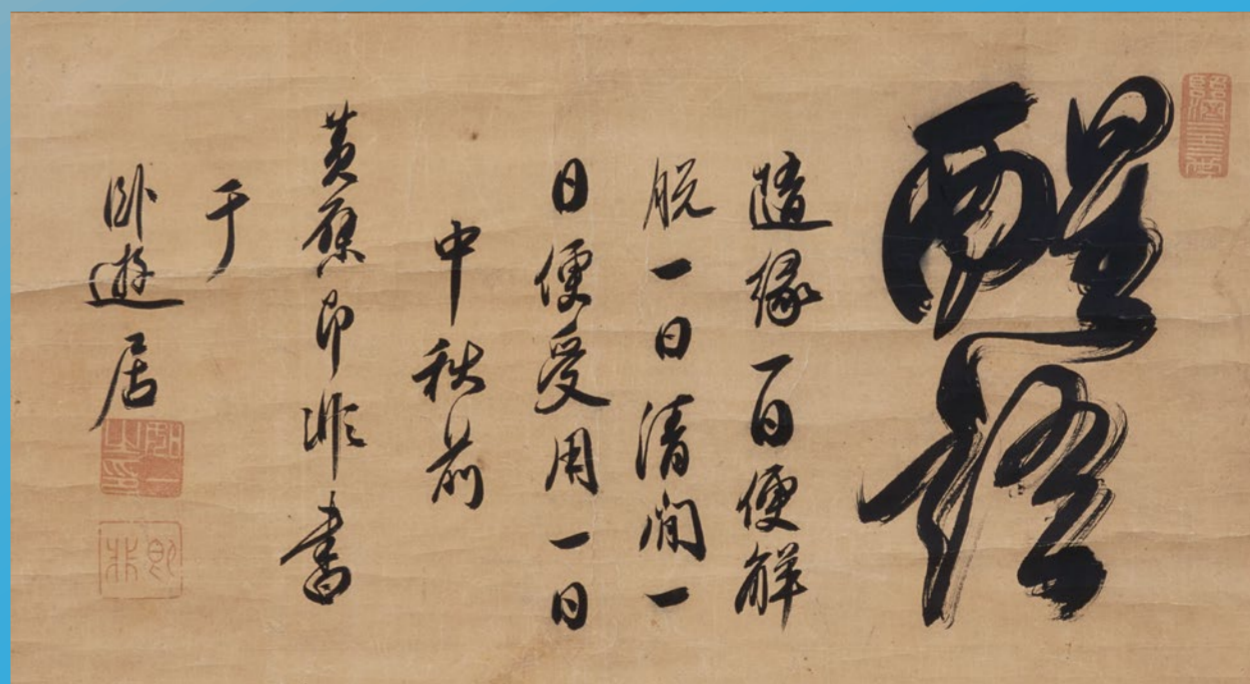
「お坊さんの書」といってなんだか難しく感じられますが、黄檗の僧侶たちの書はそれぞれが個性にあふれ、まるで書き手の人柄が書を通して伝わってくるかのようです。同じ禅の道を究めながらも、個々人の色が最大限尊重される姿勢にこそ、現代の私たちが学ぶべきことが隠されているのかもしれません。江戸の人々が憧れた書の数々を見比べながら、まずはお気に入りの書を見つけてみてはいかがでしょうか。



隠元隆琦筆《獨湛法子歸初山偈以送之》  
隠元が共に中国から渡った弟子・獨湛に贈ったもの。離れ離れになる弟子への思いがこめられている。



逸然性融画・隠元隆琦賛《寿老人図》  
隠元の賛中に「南極老人」とある。南極老人とは南極老人星（カノープス）を神格化したもので、寿老人や福祿寿のモデルとされる。道教と仏教の関係を示す作品。



即非如一筆《醒語》  
崇福寺の末庵であった「臥遊居」とあることから、即非が長崎にいる時に書かれたものであることがわかる。

# こめられる祖国や弟子への想い

## 渡来黄檗僧の書画

2019年

5月22日(水)～7月15日(月祝)

8:30～19:00(最終入場30分前) ※6月17日は休館

〈アクセス〉

路面電車「桜町」電停下車、徒歩5分  
路面電車「市民会館」電停下車、徒歩7分  
路線バス「桜町公園前」バス停下車、徒歩3分  
県営バス(風頭町行)「歴史文化博物館」  
バス停下車(1時間毎)  
長崎自動車道(長崎芒塚IC)より、諏訪神社方面へ10分

〒850-0007 長崎市立山1丁目1番1号  
TEL.095-818-8366 FAX.095-818-8407

特集展示